

---

# 時空を翔る介入者 ～千の魔法に千の技～

銀ユリヤ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

時空を翔る介入者　く千の魔法に千の技く

### 【Nコード】

N2999T

### 【作者名】

銀ユリヤ

### 【あらすじ】

俺が何でこの世界に来たのかわからない。だが、俺は後悔はしない道を選ぶ！

俺の完全妄想作品。向かう先は『魔法先生ネギま！』の世界です。主人公はぶっちゃけチート能力ですが、そんなに強いとは言えません。というより本人の戦闘は少ないかもしれません。それでも言い方はどうぞ

## 今はまだ夢の中

．．．ここはどこだ．．．？

『．．．い．．．おい．．．．．ぶか！？』

．．．世界が白い．．．何も見えない．．．

『．．．おま．．．．．が．．．い．．．のか．．．』

．．．．．さつきから聞こえる声は．．．誰だろう．．．？

『つく．．．や．．．ら．．．．．たのか！．．．．．や  
く．．．げろ！！』

．．．．．ぼんやりだけど．．．．．何かが．．．見えてき  
た．．．．．

『おまえ．．．．．の．．．？』

．．．赤い．．．．．髪．．．．．

『助かつ．．．．．あり．．．．．な！』

．．．．．魔法使いが．．．．．使いそうな．．．．．

『よし！．．．．．に．．．．．まえを．．．．．る！』

・ ・ ・ ・ ・ 大きな ・ ・ ・ 杖 ・ ・ ・

『 うっし ・ ・ ・ ・ ・ たぜ。 』

・ ・ ・ あれ ・ ・ ・ ・ ・ そういえば ・ ・ ・ ・ ・

「 『 俺（おまえ）の ・ ・ ・ 名前は ・ ・ ・ 』 」

今はまだ夢の中（後書き）

まだここからです

目が覚めたら森の中！？（前書き）

ウェストポーチからウェストバックに変更  
そっちの方がいい感じかな

目が覚めたら森の中!?

何の変哲も無い森の中、一人の青年が倒れていた。

こんな夜中の丑三つ時に、こんな森の中に倒れているのが不思議であつた。

暫くすると、青年が目を覚ました。

「う、ううゝん・・・・・・・・うああ・・・・・・・・んん!?・・・・・・・・  
ここはドコだ??」

彼は体を起こすと周りを見、知らない場所だと知り首を傾げた。

服についた汚れを払い落とし、頭を抑え何かを思い出すように考え始めた。

「俺は確か、・・・・・・・・っ!!そうだ!」

彼は何かを思いつくと、何も付いてない筈の耳に手を当てた。まるで何かが付いている様に。

すると彼は耳に当てていた人差し指と中指を、スライドさせるかのように口元に持ってきた。

すると指の軌道に沿う様に、耳から透明の水色の線が出て、線の元にイヤホンマイクのような物が現れた。そして線の先端はマイクのように丸まっていた。すると耳の機械から機械的な音がすると、

「こちら裕也。カイル応答しろ。・・・カイル・・・カイル・・・

」

どうやら機械は通信機らしい。だがイヤホンからは、砂嵐のような音が出て来るだけだった。

「チツ・・・故障してないみたいだから通信障害か。めんどくさい事になったな」

彼、裕也は舌打ちをすると手を振るように透明なマイクの線を消した。

「ウジウジしててもしょうがねえか。真っ直ぐ歩いてりや何かあるだろ」

そう言って歩き出すと、しばらくすると生い茂っていて木々が減っていき、木と木の間から月が見えるほどになってきた。

「開けてきたって事は、道は合ってるみたいだな。これで開けてきたと思ったらまた茂っていくオチじゃないよな・・・」

愚痴を言いながらあるくと、水の音が聞こえてきた。音のした方に走って行くと、そこには小さいが上流から下流に向かって流れていく川があった。

彼は安堵した様子で

「助かった。川に沿って下っていけば大丈夫だろ」

と言った。歩き出そうとすると『バンッ』という発砲音と共に、裕也の足元の土がめくれた。

「ヘッ？」

めくれた方向から撃ってきたと思われる方向を向いたが、そこは真っ暗な闇しかなく撃ってきた人物は見えない。

『無駄な抵抗は止めおいたほうがいいぞ。大人しく此方の指示に従ってくれるなら危害は加えない』

声が聞こえるが随分離れているのかくぐもっていて、木々で音が反射しているのか他方向から響いてくる。

「（クツ・・・いきなり発砲しておいて指示に従えだ？冗談じゃない！）」

そう意気込むと裕也は川を跨ぎ、反対側へ走る。当然その後を追うように銃弾が足元を掠める。

そうして走り大きな目の木の陰に隠れ、座り込んだ。そして襲撃者に聞こえるように話し出した。

「悪いが何処の誰かも分からないやつの指示に従う気は無いんでな！抵抗させてもらうー！」

『そうか・・・なら、此方も仕事なんでね。鎮圧させてもらうー！』

そう返してくると、四角いウエストバックからどう見ても入り切れないほどの大きさの銃を2丁取り出した。暗所用のために銃身の下に小型ライトが取り付けられている。

それを両手に持ち腕を交差するように構えると、立ち上がり様子を伺う。

「（行くなら今か）・・・よし！・・・行くぞー！」

木から飛び出し、反対側の木々に向かって銃口を向ける。そして引き金を引く。

バーン！！

銃声が月下に響いた

目が覚めたら森の中！？（後書き）

結構前から書き溜めてあったもので文才はあまりありません。

困難でよかったですらまたみてください

「難去ってまた一難！？ 俺は無関係だ！（前書き）」

ぶっちゃけ戦闘シーンはできません・・・多分

会話の中に多重クロスの片鱗は出してきました

「難去ってまた一難！？ 俺は無関係だ！

「引き分け・・・か？」

「確かに・・・だがこのままどちらかが引き金を引けば、どちらかが死ぬのも確かだ」

「まあな・・・だが、そんな危ない橋を渡るような性格して無いだろ、お互い」

「確かに。私は金をもらって仕事をしているからな。死んでも金が見えるなら構わず撃つが？」

「傭兵って奴か。でも、死んだら金は自分の葬式に使われるか、遺族に分配。最悪見ず知らずのバカに掠め取られるか、どうかの慈善団体に寄付されるのがオチだな」

「確かに。なら遺書には金は遺体と共に棺に入れてくれとでも書いて置くよ」

「確か棺に札束入れて死ぬために、金庫破りしようとしたジジイどもの映画が在った気がするのをその発言で思い出したわ！ っていうか、お前最初いつも『確かに』って言うてるの自覚してる？」

「確k・・・わ、わかっててやっていたのさ」

「（・・・それで誤魔化したつもりなのか？）」

結果から見ると、引き分けに終わった。

撃っては木に隠れ、撃っては木に隠れを繰り返し、何十回か繰り返した後木に背を預けた裕也が振り向きざまに構えると、一気に接近してきた襲撃者と互いの額に銃を突き付けたのだ。そして今に至る。

「で、いい加減止めないコレ。腕疲れるんだけど・・・」

「君が銃を下ろしたら私も下ろすさ」

「とか言って、俺が下ろしたら撃つつもりだろ」

「そんな無粋な真似はしないさ。これ以上弾を無駄にしたくないからな」

裕也は少し考えた後、肘を曲げ銃を上へ向けた。少し間を置いて、褐色で黒髪の女性襲撃者は銃を下ろした。

「フン！まあいいさ。それより聞きたい事が・・・」

『オイ、いい加減こつち気付や！』

「「うん？」」

そこには、どう見ても人とは思えない巨体や、角が生えていたり、翼が生えていたりなど様々な異形が50以上いた。2人はしばらく異形を見つめ、裕也が先に

「なあ・・・まさかお前の知り合いじゃないよな？」

「それこそまさかさ。どちらかと言うと、侵入者である君のほうに関わりがある可能盛大だが？」

「確かに知り合いに人外は居るが、あんな化け物は・・・いや・・・確かに一人いるが、アイツは見た目アレだけど、アイツは結構紳士だから・・・」

「何一人でブツブツ言ってる。まさかお前が本当に呼んだのか？」

「何でもねえよ。あとさっきから言ってるけど、俺とあいつらは無関係だったの！」

『お前ら無視すんじゃないっ！！』

槍を持った異形が2人に向かって槍を投げてきた。2人は素早くその場を離れると、2人の後ろにあった木に槍が刺さった。それを見て裕也は、

「ほらな？関係あつたらあんな風にいきなり投げてはこないさ」

「いやそれは・・・まあいい。私は本来の仕事ですすただけだ。そこでじっとしてろ！」

そういうと、彼女は銃を異形に向けて、引き金を引いた。

ドン！ドン！ドン！ドン！

連続する発砲音と共に、異形たちが1体1体と消えていった。反撃するために接近しようとする者もいたが、彼女はそれすれ許さず近くに來たものから次々と倒していった。

『ツチ！術の込めてある弾か。だが対策は聞いてある！オマエら弾切れになるまで、粘るんや！』

そう、どんなに弾が入る銃でも弾倉に入る弾には限りがある。つまり弾切れだ。弾切れになれば弾倉、マガジンを入れ替えなければならない。その間は無防備になり、異形達はそこを狙うつもりであるのだ。

彼女は弾切れを狙っているのと知りながらも、撃つのを止められない。止めたら四の五の言わずに襲い掛かってくるのを分かっているからだ。

そして引き金を引くと何もでなくなった。弾切れだ。

「クッ！」

『今だ！行け！』

そうすると、一番近くにいたヤツが彼女の懐に入り込んだ。そのまま手に持っていた斧を振り上げた。

『悪く思ふなよ！』

「（回避が間に合わん！）」

バンッ！

『いで！誰だ！？』

もう駄目思ったとき、銃声と共に異形の米神に銃弾が当たった。だが彼女の撃った銃弾の様には効かず、多少傷ついた程度だけだった。全員が撃たれた方角を見るとそこには銃を構えた裕也がいた。

「やっぱあんまし効いてないか・・・」

『ん？おお、そういえばもう一人いたな』

「バカ！なぜ出てきた！死にたいのか！？」

「そう言われてもな。女性がピンチなのに助けないのは男の恥でしょ？」

さも当然のように言う裕也を見て女性は啞然と見ているしかなく、そばにいた異形が裕也に向かうのを止められなかった。

『邪魔するってんなら、お前が先だ！』

「しまった！逃げろ！」

異形はすさまじい速さで裕也に近づくが、彼は慌てずに両手の銃をクロスさせるように構えた。

『そんな弾効くわけ無いと分かってるだろ！』

「ああそうだな・・・だが」

裕也は引き金を引く

バンッ！

『いてっ・・・だから効かないとバンッ！　った！だがら！バンッ！　ガッ！』

裕也は順番に引き金を引く。引く。引く。引き続ける。  
そのたびに発砲音がが鳴り響き、異形に当たっていく。異形は足を  
止め身動きが出来なくなっていく。  
そして

『ガッ・・・ギヤアアアア!!!!』

異形は煙のように消えていった。

「『塵も積もれば山となる』どんなに効かないといっても、ダメ  
ージは蓄積されるだろ？」

『て・・・てめえ、よくも・・・』

「さあ、次は誰だ？」

銃を向け挑発する裕也に、リーダーであろう鬼はキレた。

『お前ら、そこの嬢ちゃんの後回しや！先にこのガキ潰すぞ！』

『お頭あ殺しちゃいけないんじゃないツスカ？』

『息があればええんや！その後死のうがうち等には関係ない！』

『おお！さすがお頭！知恵が働くツスね』

「物騒な会話すんなよ。しかも対称俺じゃん・・・」

そうしている間にも大群で押し寄せてくる。裕也は銃を一回転して薄い笑みを浮かべた。

「OK！かかって来い！！」

「難去ってまた一難!？」 俺は無関係だ! (後書き)

感想と評価があるとうれしいです

## 銃弾演舞くバレットダンス>(前書き)

この話には某隠れて撃つてのアーケードゲームネタと、DMCのセリフネタが含まれております。  
特に気にしないで見てください。

## 銃弾演舞くバレットダンス

サイド「謎の

いや、もういいだろ。もう誰だかわかってるだろ？

サイド「龍宮」

うん、それでいい

私の名前は龍宮<sup>たつみや</sup>真名<sup>まな</sup>。体格から大学生とされているが、れっきとした中学生で今は雇われの身だ。今日も仕事で侵入者を排除するためにここまで来たのだが、銃の腕がうまい少年（見た感じ私達と同じくらいの年齢だろう）に後から出てきた召喚された妖怪。妖怪達を優先させたのだが弾切れを起こし、一気に接近させられて窮地に陥った所を救ってくれたのが、先ほど戦っていた少年だった。

しかも彼が使っていた銃は実弾であつたが術式を施されていないものだった。にもかかわらず彼は銃の連射の物量に物を云わせて、接近してきた妖怪を還させたのだ。その光景に啞然としてしまったが、これは単なる序章に過ぎなかったのだ・・・

『うわあー！』

『くそっ！またやられた！！』

『何でだ！？ヤツが使ってるのは普通の弾だぞ。数もこつちのほうがいい・・・なのにギャアア！』

『ツク・・・なんであいつはかすり傷ひとつ付いてないんだ！？』

そう、妖怪達が言ったように彼は大群相手に傷を負わずに対等に戦っているのだ。

振り上げた武器を撃ち落して、怯んだ隙を突いて顔面に連射。紙一重で攻撃を避けながら空きの背中に連射。遠くにいる敵もまばらに撃ったとしてもその後ろにいる敵に当たってまったく無駄となっている弾が無いのだ。

「どうした！こんなもんなんか？」

『ツク！なめるな！！』

それに疑問に思った事がある。今までで彼は2丁合わせて数十発以上撃っているはずなのに、まったく弾切れしないのだ。彼の銃は銃身にライトが付いてるだけの普通の9mmハンドガンタイプだった。

『どうだ！この速度なら当たるまい！』

「・・・確かに狙って撃つのは無理だな。・・・なら乱れ撃つのみ！」

空中を素早く移動する鳥型の妖怪を相手にすると、何も臆せずに銃を顔の前でクロスさせた。

そして、

「マシガン！」

# ACTION

銃に向かつて声をかけると銃から電子音に近い声<sup>ゴ</sup>がした。それを飛んでいる妖怪方向に向け引き金を引いた。

**ダダダダダダダダダダダダダダダダダ！**

「な、なに！？ ガッ！」

「そこか！」

引き金を引いたまま弾丸が放たれて行き、飛んでいた妖怪は終いには蜂の巣のようになって消えていった。あの連射力……彼が言っていたように『マシンガン』としか言いようが無い連射能力だった。

妖怪達も動揺していたが、奥から鎧を着たのが出てきた。

「どんなに連射がすごくても、この強固な鎧は貫けんぞ！ハアッ

「！」

「つく」

マシンガンの連射を手に入れた銃を鎧を着たのに向かつて撃つが、かなり硬いらしく全ての弾を弾き返し接近を許してしまった。だが彼は冷静な目で右の銃の連射を維持しながら、左の銃を顔に近づけた。

「接近してきたらでかい一撃を・・・ショットガン！」

## ACTION

先ほどと同じ電子音がし、左の銃を接近してきたヤツに向け引き金を引いた。

ズドンッ！

『ア・・・ガッ！』

「ショットガンってのは、的にいくつもの穴を空ける意味合いもあるが、近距離で当たれば威力がでかいんだぜ・・・」

腹に響く低重音と共に鎧を着た妖怪は腹にいくつもの穴を開けて消えていった。

すると今度は違う方向から大量に押しかけて来るのが見えた。だが彼は先ほどと同じように銃を顔に近づけて、

「束になつて来るんだつたら有り難い・・・まとめて吹き飛ばすのみ！グレネード！」

# ACTION

ドンッ！                      ドガン！

『『『ギャーーーーー！！』『』』』

引き金を引けば空気の抜けた音がし、飛び出た弾は放物線を描き奴らの足元に着弾すると同時に爆発し、周りにいた奴等諸共吹き飛ばしていた。

その後もハンドガン・マシンガン・ショットガン・グレネードを使い分け敵を駆逐して行つた。最終的に100は居たであろう妖怪は、親玉らしき大型1体を残して跡形も無く消え去つていた。

『ぐぬぬ・・・たった一人。しかも術の籠っていない弾で・・・』

「御託はいい・・・ファイナーだ！」

そう言うつと彼は走り出し、ハンドガンになつていた2丁を親玉の

顔面目掛けて連射する。が、一筋縄ではいかないようで両腕でガードしている。彼は引き金を引くのを止め、

「マシンガン！」

ACTION

今度は片膝目掛けて連射した。すると流石に応えたのか小さく呻きながら膝を着いた。その隙を逃さずに、彼はその膝を利用して高く飛び上がり、

「ショットガン！」

ACTION

親玉の顔面目掛けて撃ち放った。奴の肩を利用し背中に回りこむのと、奴が顔を抑えるのはほぼ同時だった。背中に回った彼は落ちながら背中に銃を向け、

「ハンドガン！」

ACTION

無防備な背中に乱射する。黙ってやられるわけが無い親玉は、腕

を後ろに向かつて振るが彼は着地と同時に奴の股の間を抜けて回避した。親玉が正面を振り向く前に彼は銃を構え、

「グレネード！」

## ACTION

『な！？』

銃口を振り向いたまま硬直している親玉の顔面に狙いを定めていた。一瞬の出来事なのだが、長い時間止まっている気分になった。そして彼が口を開いた。

「こういう時って何て言えばいいんだ？・・・そうそう・・・」  
「ジャックポット」！

『！！』

ドガン！

親玉は後ろに倒れながら消えて行った。残ったのは静寂と穴だらけの木、グレネードの火でコゲた枯葉だけだった。

まるで戦争だ。多対一、数だけ見れば一が圧倒的に不利なのは明白だ。だが彼はたった銃2丁で多を圧倒して見せた。向こうが近代兵器を持っていなかった事もあるが、彼は圧倒的な火力を持って一掃したのだ。もしかしたら戦争をしても彼が勝ってしまうのではな

いかと思えるほどに・・・

しばらく辺りの様子を伺っていたが、伏兵がないのを確認したのか、彼はどう考えても入りきらないウエストポバックに銃を収め、私に近づき話かけてきた。

「!」

「そう警戒するな。俺が思っている一番重要な質問に答えてくれればいい」

「な、なんだ？」

「・・・ココは何処だ？」

「・・・・・・・・・・は？」

「・・・頭が痛くなってきた・・・」

## 銃弾演舞くバレットダンス>(後書き)

作者は戦闘シーンは苦手な修行者です・・・長引かせるより短期決戦です。

評価・感想楽しみに待っております

## WGPⅡ 時空警備隊（前書き）

やっと主人公の組織の話の所まで来た。

これがあることで、いろいろと話を展開させるといっても過言ではない

## WGPⅡ 時空警備隊

サイド「裕也」

特に記述する事柄もなく、俺は学園長室前に辿り着いた。あえて記述するならば、予想以上の学園の規模と建物がヨーロッパ調な事ぐらいだ。

扉の前にいる彼女と名前は交わしてないが、この学園、麻帆良学園について大体の話を聞かせてもらった。もちろん表の話だけで、今から裏の話をすると言った所だな。

コンコン

「失礼します。例の侵入者を連れて来ました」

『うむ。入りましたまえ』

「（侵入者って・・・）」

彼女が扉をノックし声をかけると中から老人の声―恐らくここの最高責任者―で返事がし、扉を開け中へ入ると、それに続き扉をくぐると・・・

「うわぁーお！お熱い歓迎だ事」

そこには奥の大きい机越しに座る老人を中心に多種多様な男女が並んでいた。

流石に殺気立つ人はいないが、皆俺の事を警戒している様子。そんな視線の中真ん中の老人が口を開いた。

「先ずはうちの生徒を助けてくれてありがとうと言って置こうかの？」

「だったらこちらもどう致しましてと言って置こうか。だが俺が居なかったら彼女は殺られてたぞ」

「いや、本来は二人一組なのじゃが、片方が他の所に応援に行つた隙を付かれたのじゃ。それに関してはこちらのミスじゃ」

なるほど。注意を別の所に集中させて伏兵を出す。戦術の基礎だな。敵も突撃させるだけのバ力では無かったって事か。

「さて一番重大な話をしよう。  
君は何者じゃ？」

「ん？おつとまだ自己紹介しないな！」

そう言つと俺はウェストバックから、黒く薄い手帳の様な物を取

り出した。それを開くと中から俺の写真と名前、そして盾の形をし地球とWGPと彫られた金バッチが付いていた。  
まあ警察手帳を横にしたものだな。

「自分はWGPの石神 裕也です」

『!?!?』

俺言葉に周りの人がざわめき始めた。

WGP

World

Guard

Police

和訳で国際警備警察ということになる。世界を股に掛けて捜査をし、犯罪を阻止する特殊部隊なのだ。でもその存在は表には出ず、政府や警察機関に一部の人間しか知られていない。そして重大なのはどの組織・国家に属さずどこに本部があるのか分からないのに、隊員一人一人が一国家並の権限を持っている事だ。それと同時に多種多様な武装をし、たった一人で犯罪組織を壊滅させたという噂まで流れていて、影ではなく国境無き軍隊なんて言われてたりする。  
表の人間は知らないのです、この人達は必然的に裏の人間となる。

「そう言う事ならばこちらも話さなければの。」

ワシは関東魔法協会最高責任者兼、麻帆良学園学園長の、近衛 近

右衛門じゃ」

なんとも凄まじい肩書きをお持ちだ事で。俺の身元が判明したからか、俺に対する視線が多少軟らかくなった。が、WG<sup>俺達</sup>Pに対して良い印象がない者もいるようで、変わらず鋭い視線がちらほらある。その視線に気が付いたのか、学園長さんが、

「では彼の身元が分かった所で、何故来たのかは後はワシが事情を聞いて置くから、皆は速やかに今夜の始末と報告書をまとめてくれんか？後龍宮君は残ってくれるか？」

「はい」

そう言うつと皆学園長室を出て行き、俺と学園長さん、俺を連れて来た彼女―龍宮という名前らしい―が残った。

俺は少し龍宮さんを見て、学園長さんを見た。

「彼女を残したのは？」

「龍宮君には知る権利はあると思うての。それにいつか君も話すつもりだったじゃろ？」

「確かに・・・な」

俺と学園長さんが意味深な会話をしている中、龍宮さんは俺と学

園長さんを交互に見ていた。  
そして学園長さんが一息し、口を開いた。

「さて、皆にはああ言ったが、本当の顔を見してくれんかの？」

その言葉に俺は真剣な目をし龍宮さんを一瞥してから、手に持っていたWGPの手帳をバッチが見える様に疊んだ。すると手帳が光だし、その光が収まると手帳は四角い機械に変わっていた。色も黒から白に変わり、先程の写真などは空間ディスプレイへと変わり、WGPも別のものになっていた。

「改めまして、自分は時空警備隊、グリーンコマンダー・ランクAの石神 裕也です」

「やっぱりの〜」

「時空警備隊？学園長どう言う事ですか？」

龍宮さんは俺が言った言葉に疑問を持ち、事情を知ってるようである学園長に聞いた。

「なに簡単なことじゃ。彼は魔法世界とは違つ、『異世界』から来た者と言う事じゃ」

「異世界・・・ですか？」

そうしてその視線を俺に向けてくる。あまり信じてない眼をしてるが、いきなり『私は異世界人です』なんて言われて信じるのは、ただのバカか某大いに盛り上げる団の団長くらいなものだ。そうして俺から視線を学園長へ戻す。

「わかりました。今はそう言う事にしておきます」

「『今は』か。手厳しいの」

「時空警備隊云々はともかく、あのバッチが変化するのはうちのクラスの生徒ならあつという間にできそうだけどね」

その言葉に学園長はぬうう、と言い苦笑していた。

その発言だと、その生徒は警備隊に近い科学力うちを持っている事になるぞ？

龍宮さんは『時空警備隊とはなんだ？』と聞いてきたが、話すとWGPの時より長くなりそうなので、追々話すということにしまった。

「では、君が何でこの世界に来たのか、教えてくれんかの？」

「え？あ、ああ！そうでしたね、なんで俺が・・・ここに・・・いるのか・・・アレ？」

なんで俺がこの麻帆良学園に来たのか、その前の事を思い出そうとしたが・・・思い出せない！  
えっと、たしか凜さんの家に行つて、そこになんとか皆集まつて、魔術の・・・いや魔法の実験をするといつてそれから・・・それから・・・思い出せん。

「どうしたのかの？」

「あ、いえ。友人のまじゅ・・・魔法使いの家に行つて、魔法の実験をすると言つて・・・そこから何故か思いだせないんですよ。多分その魔法を使うときにまた『うっかり』を発動させて、魔法を暴走させた時に俺が巻き込まれてここに飛ばされたつて所ですかね？」

「いや、聞かれても困るんじやが・・・」

「すみませんね。どうも最近忘れやすくて」

この原因は薄々だが分かっている。でもこればかりはどうすることもできないしな・・・

「警備隊の方には連絡がつかないのかの？」

「ええ。多分暴走の影響で、時空間に乱れができているせいかと・・・」

「そうか・・・まあこれ以上はまた後日ということでもいいかの？」

お主もいろいろあつて疲れたじゃろ？」

「ええ・・・まあ・・・」

「ここの宿直室を使つていいから、もう休みなさい。明日の朝にまた来てくれんかの？ 龍宮君、案内してもらえんか？」

「ええ、わかりました」

「ありがとうございます」

今夜はここで打ち切りとして、また明日ということになった。

そうして俺と龍宮さんは学園長室を後にした。横目で見たとき、学園長が嫌な笑みを浮かべていた気がした。

「ここだよ」

「お、ここか」

その後龍宮さんに付いて行き宿直室まで案内してもらった。少し中をのぞくと、畳3畳ほどの広さしかないが、寝泊りするには十分な大きさなのを確認した。

「案内してくれてありがとうな、龍宮・・・さん？」

「そうか、まだ自己紹介してなかったな。私の名前は龍宮 真名

だ。これでもまだ中2でね、さんはいいよ」

「へ？中2？？でもどう考えたって「気にしないのが得策だよ？」  
わかった。わかったから銃を仕舞ってくれ！」

俺が龍宮の年齢に関して言おうとしてら、いつの間にか取り出した銃で俺の顎を狙っていた。  
とつさに謝って引いてもらったが、やっぱりどの世界でも女性の年齢に関しては禁句らしい。

「分かればいいよ。それにしても君の持っていた銃、一体何なんだい？全く弾切れしないのもそうだけど、4種類の銃を1丁で扱うなんて・・・」

「ああ、コレか？」

どうやら龍宮は俺の銃に興味があるらしい。まあ銃を扱う者として興味を示さない方が可笑しいか。俺は自他共にどこにそんな物が入っていたのかと思うウエストバックから銃を取り出す。

「警備隊ウチの技術班はいろんなものを作っていてな、空想の産物でも基本的な設定があれば実際に作ろうとするんだよ」

「うん。つまりその銃も実際には空想の産物だったと？」

「そうだ。名称としては『TCガン』って呼んでる。その名前も、

元ネタのゲームから来てるらしい」

「ふ〜ん・・・そういえばなんで無尽蔵に弾が出たんだ？」

「ん？なら実際に見てみるよ」

そういつて龍宮に銃を差し出した。彼女は受け取るとまじまじと見る。俺はグリップの底、弾倉の部分を見るというジェスチャーをする。龍宮は首を傾げながら弾倉を見ると、驚愕の顔になった。

「弾倉が・・・無い！？」

「そ、弾倉はない。弾は亜空間から無尽蔵に送られてくる。時空間とは違うから時空の乱れの影響も受けない。以前はカートリッジを入れることで銃の種類を変えるって案もあったらしいが、携帯性と換装時間の問題で音声認証になったんだ」

「ふ〜ん・・・でもいいのかい？こう安々私に渡して。この銃で君を撃つ事もできるんだぞ？」

そう言つて銃を向ける龍宮。だが俺は全く気にしない様子で細く笑みを浮かべる。その様子を龍宮は不思議がつて見る。

「それは無私な話だ。そいつは指紋と静脈センサーで登録してないやつには引き金一つ動かない」

その言葉を聞いて彼女は引き金を引くがびくもしない。彼女はため息をつき俺に銃を返し、受け取った俺はそのままウエストバックの戻す。そして彼女の視線はポーチに向く。

「ハイテクだな・・・ということは、そのポバックもその技術班が？」

「まあな。ゲームで普通に考えたら『どこにそんな量のアイテム収めてたんだ！？』ってのを実際に再現したらこうなった。中は異次元空間に繋がっていて、収納数には限界があるがどんな質量でも入れられるって代物だ」

「なるほど・・・って、そんな重要なこと私に言ってもいいの？」

「ん？そんな事か。教えても実現化なんて不可能だし、誰かにリクしても絵空事だといわれるのがオチ。それに・・・」

「それに・・・？」

「お前はそんなことしない。俺の勘がそう言ってる」

その言葉に龍宮はポカーンとしていたが、急に笑い出した。笑われると急にさっき言ったセリフが恥ずかしくなってきた。それをごまかすように龍宮を睨みつける。

「ははは・・・そう睨むな。まあたつた一晩で敵となり戦友となつた、こんな経験初めてだよ。そうだね・・・君とは長い付き合いになりそうだ。私の勘がそう言ってるよ」

そう言つて俺に手を差し伸べる。ちよいとはかし納得も行かないが、俺も手を伸ばし握手をする。

そうして俺は宿直室に入る。龍宮も昇降口の方へ向かう。その背中に向かつて

「そんじゃ・・・また明日、な！」

「ああ・・・また明日、」

そうしてはふすまから布団をだし、その上に横になる。どうも思っていた以上に疲れが溜まっていたらしい。すぐに睡魔がやって来て、目蓋が閉じていった・・・

その日俺はこの土地『麻帆良学園』で、あんなにも楽しく、悲しく、嬉しく、悔しく、そして忘れられない日々が待ち構えてるなんて思つてもいなかった。

## WGPⅡ 時空警備隊（後書き）

以上厨二な設定でした

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2999t/>

---

時空を翔る介入者 ～千の魔法に千の技～

2011年8月19日01時16分発行